



東九州支部報



鹿嵐山にて (1月22日)

一月二日(日曜日)まだ暗く冷たい雨の降る中、サニー前を午前六時に集まった十一名は、車四台に分乗して出発した。途中、別府観光港を経て一路北へ。早暁の冷え込みのなか、降ったり止んだり空模様が一喜一憂し、心配された赤松峠の路面凍結もなく順調に走った。

鹿嵐山は平成六年五月に石楠花を見に登って以来であるが、途中の道路が広く良くなっていたり、登山口の田ノ平には駐車場まで出来ているのに驚いた。先についているはずの飯田さんの車がない事を不信に思いつつも出発の準備にかかる。冷たい雨は山道に入ると雪に変わっていたし、携帯も通じないという。案じている時に二台の車が下りてきた。上の登山口で雪の降る中、一時間近く待っていたとのこと。

みんなそろったところで、鞍部へ直登する安部、西、中野さんら三名と、雌岳を登る一四名とに分かれる。山を仰げば麓の緑、霧氷林、空は鉛色の冷たいみぞれ雨の中、飯田さんをトップに八時四三分に雌岳組は出発する。

スギの植林の中の登りは濡れた落ち葉がよく滑る。植林地を抜けて衣類調節の休みの後は、雪まじりの滑りやすい急な登りで懸命に登った。目白か轉もきかれる。今日のテーマの花は寒椿だが、椿の木には花らしいものが見えたらいい。この寒さに遅れているのだろうか。

雪の尾根に出ると林も開けて明るくなり、登りも緩やかになり、急な登りの続きだったので「ホッ！」とした。

九時五五分に雌岳山頂到着。石祠は雪をのせ、あたりは踏み

鹿嵐山

寒椿鑑賞登山

一月月例山行報告

安藤セツ

《 も く じ 》

鹿嵐山	1
定例総会開催	2
古処山・屏山・馬見山	3
上福根山・蕨野山	4
グリーンデングルト・トレッキング⑥	6
秋の単独行	6
17年度登山記録	7
私の無名山ガイドブック 24	7
今西錦司⑥	8
定例総会の主なこと	9
お知らせ	8
後記	10

跡だらけと化した。
遠江さんが雪を集めて何やら作り始めた。密とクリームを入れて掻きませシャベットの大きさが。口に入れてもらったから冷たさで口が痺れたが美味しかった。雪山ならではの楽しみ方だ。



(鹿嵐山雌岳にて)

山頂写真撮影の後出発。すぐ下りとなる。雄岳への登りを思うと「あ、もったいない」と思うのは私だけだろうか。

鞍部の雪道には三人の靴跡が残っていた。すでに先に登っているようだ。やがて西さんの声が聞こえてきて、合流する。そして、一〇時三五分、冬晴れとなった雄岳山頂へ着く。佐藤

(秀)さんの音頭で一七名の『万歳』が仰した。

すぐにビールで乾杯するひと、いつもながらの山頂風景、三六〇度の眺望を愛でながら昼食とする。誰か山頂でお湯を沸かすから、お湯はお任せとか言った人がいたけど、お湯は出ませんでした。「なしか!」今日の集合場所の感違いを反省した。

山頂写真を撮り、風格のある一等三角点に西さんが今西流の儀式をして、雪の中に赤い実をつけた深山楢に寒椿の紅を思い、十一時五分、山頂を後にした。雪に濡れた落ち葉が滑りやすい、急坂を、木をつかみ、ロープにすがり、岩に這って六十分かかってやっと緩やかな道となると、十二月に死亡事故があった万里の長城に近い。早々におニューの帽子をしまい込んだ安部さん、それぞれに気持ちを引き締めている様子。日はさしているが風が冷たいので、奇岩の『万里の長城』と呼ばれる風景を眺め、地蔵峠へと下る。

分岐点を一時五分で、五分下って地蔵さまのお姿が・・・何と立派な小屋が建ち、周りにはマットが敷かれて、賽銭箱まで置かれてあった。以前は二人だけでいるのが寂しいくらいひっそりとしていたのに!地元の方たちが大事に守っているのだからだろうと解釈した。

青木の赤い実を寒椿の紅に見変えて林道へ・・・。一時三十

五分に到着。一足先に急いで下り、車を下の駐車場まで取りに行った方たち、ご苦労様でした。福岡へ帰る佐藤(秀)、那須さんを見送り、皆で仙岩山の景色を見物して解散した。



(地蔵峠)

○山嶺の雪に真赤な

実がのぞき

○鞍部より仰ぐ雄岳に

冬日射す

○山嶺や沢庵漬がまわりくる

○寒椿見ぬまま下る山ふたつ

せつ

参加者：安部、安藤(幹)、安藤(せつ)、飯田、石川、岐部、久保、後藤、佐藤(秀)、園田、遠江、中野、長野、那須、西、牧野、三浦、

一八年度支部定例総会を開催 記念講演は「エベレスト登頂報告」

平成一八年度支部定例総会が、去る四月一五日(土)に大分市「コンパルホール」で開催された。総会には会員・会友、八〇名(うち委任状四八名)が出席し、まず最初に議長として興田勝之支部員が選任され、次いで梅木支部長が「一七年度は日本山岳会創立一〇〇周年の記念の年として、いろいろな行事や事業が実施され、東九州支部としても分水嶺の踏査を始め各種行事等に積極的に参加するなど意義ある年であった。今年度も月例山行や青少年体験登山大会など数々の行事や予定もあり、また、支部創立五〇周年も近づきつつあるなか、前もっていろいろな準備を進めていきたい。一八年度も更なる飛躍に繋がるよう、支部員の協力をお願いしたい」と挨拶があった。

続いて一七年度の報告に入り、西支事務局より事業報告、加藤幹事より会計決算報告、安藤監事より監査報告があり、また事業報告に関連して中央分水嶺の踏査について担当の飯田幹事より報告があり、それらが一括承認された。

そのあと、西事務局より一八年度事業計画の提案があり、この中では、今年度の月例山行は一二支にちなんだ名前の山を選んで登ること、青少年体験登山は今年も夏休みに入ったら実施すること、今西錦司博士にちなんだ「一二支会」の今年の山は『亥』で、大分県の猪群山で実施されることとなったことなどのほか、各種行事などの説明があり、質疑・意見が出され、提案道理決定された。また、支部報については、いっそうの充実をはかるために編集委員を新たに選任することが決まった。さらに、会計予算案は加藤幹事より提案があり、原案通り決まった。

総会終了後は記念講演会で、講師は平成一五年五月に東京農大OB会のエベレスト登頂に参加した大平展義支部員がつとめた。準備の段階から、ネパールへの入国、ベースキャンプから順次キャンプ設置しながら登頂に至る経過等について、約一時間にわたって、ビデオやスライドを交えて生々しい体験報告がなされた。

報告 飯田勝之

古処山・屏山 馬見山

「トザミズキ」

の花をたぎわて

(二月月例山行報告)

長野 珪子

二月十八日午後七時過ぎ、日が暮れて冷え込んで来たなか、サニー前を第一陣が出発しました。佐藤正八さんと中野さんの車二台で七人(西、石川、佐藤(正)、中野、牧野、三浦、長野)です。大分自動車道を甘木ICで下り、秋月をぬけてその夜は古処林道の終点にキャンプです。猪の焼肉で舌鼓を打っているのと一台の車が停まり、懐中電灯が近づいてきました。若い男性のようです。二言三言話したら、こんな時期にこんな所でキャンプをする人を初めて見たと言って登って行きました。こんな時期に、こんな時刻に登る人も居るものだと思っただ事でした。

古処山(こしよさん)の三角点が見当たらない

翌十九日まだ明けやらぬ頃サア出発という時、ちょうどタイミングよく福岡からの三人(佐藤秀、小竹、奈須)が到着しました。そこで下山場所に車を返しに行く三人(中野、佐藤秀、

石川)と、下山場所待つ一人(三浦)と、ビスターリ登りを楽しむ六人(西、佐藤正、小竹、奈須、牧野、長野)と三組に分かれ行動を開始しました。

五時、早朝のシンとした空気を心地よく感じながら、懐中電気の明かりを頼りにビスターリ組は登り始めました。登山道は地元の小学生がいつも登っているとかで、樹木の名札とか、標識板があり、道は整備されています。振り返ると木の間隠れに秋月の街の灯が見えました。遠くに瞬いているのは甘木の街でしょうか。

高度差一五〇mくらい、五時三〇分に三本杉を見て、次に水舟(水場)を見て、もうここはなんと八合目でした。六時一〇分過ぎにツグ原始林の説明板の前に出ました。この辺り一面オツゲの木で覆われているようで、それに気をとられて歩を進めたところ道をそれたようです。まだまだ懐中電気の明かりは必要です。少し戻って西方向に進み九合目の標識を探し当てました。ここからは少し急坂になり、六時四五分、古処山頂上の祠のある一角に出ました。地元の人たちが大切に祀りしているのでしょう、祠は縦横五〇×六〇cmくらいで小さいのですが、前面を金色に塗った石造りで、セメントで塗り固めた広い座もありました。

しかし三角点はどこにもあり

ませんでした。大岩に登ったり、木の間を探したりもしましたが見当たりませんでした。(古処山には三角点はなかったのです)

頂上からは色薄く九重連山が見えました。日の出を見ようと東の方に目を向けると、これから向かう屏山、馬見山が、その先には遠く由布岳も見えました。気温はマイナス一度でも寒く、結局、日の出は拝めなかったのですが、頂上にはかれこれ四〇分くらいいました。

屏山(へいざん)へ

七時三〇分、古処山から屏山に向けて急な下りから始まります。ツゲの原生林を抜けたら、両側は杉やシキミです。一m位の石を割って生えているド根性の一本もありました。道の所々に三cmくらいの霜柱が光っていて、ザクザクと踏み音を立てて歩くのは気持ちのよいものでした。この道は九州自然歩道で、案内板が多く良く整備された稜線道です。



屏山までは一、七kmと書いて

あり、三〇分くらいから先は、(屏山より犬ガ岳と英彦山(右))



した。

馬見山(うまみやま)へ

残す馬見山を目指し九時一〇分出発です。宇土浦越着十時五分、案内標識によれば、馬見山まであと一、四km、東に見上げる先です。この峠を一〇分くらい登ると四等三角点があり七一mのピークです。落ち葉敷きつめた道を歩きます。丸太の階段に差し掛かるころ安部さんが迎えに来てくれました。

話は変わりますが、自然歩道の案内板にはかたつむりマークが描かれています。これを見るとなんとなくホッとさせませんか? ポチポチ歩こうよ! 自然を楽しみましょうよ!

『ガンバレ山頂まで一〇分』と書かれた札をしっかりと目にし、緩やかになった坂を上り、一等三角点の馬見山、九七七、

車を回しに行った後続の中野さん組と携帯電話が通じ、ここで待つことにし、料理上手の小竹さんのアジ鮎と鶏おにぎりを賞味しながら三人を待ちました。八時五十五分、三人と思っていたら、飯田さんと遠江さんも合わせた五人と一緒に登ってきた。一気ににぎやかな雰囲気となりました。そして安部さんも宇土浦コースから馬見山へ向かっているということで、全員で十三人です。ここで自己紹介をしました。屏山からは雲上に浮かんでいる雲仙普賢岳も見えま



(馬見山にて)

八mに一時二三分着きました。五時から登り始め、休憩時間や待ち時間も入れると、六時間を越えていました。展望が良く福岡側の山が見渡せます。

いつかは福智山にと思っていて私は、その姿を追い求めました。形の良い山が横たわっていました。香春岳、英彦山も分かりました。昼食をして頂上には四〇分ほどいました。



小石原方面へ下山

十二時丁度になり始めました。二五分くらい歩いた所に距離を示す標識が立っていました。馬見山(三、五km)、宇土浦(一、四km)と書かれています。ん？数字が入れ替わっているのかな？少し下ると岩の展望台があり東方、南東方向に由布岳、涌蓋山はすぐ分かります。頭一つとびだした渡神岳も目をひきます。シキミやアブラチャンの林の

自然歩道には陽が差し込んでいます。日焼け止めクリームを塗り忘れた事を後悔しながらも、今日も歩ける幸せを思いました。

ところで今回たずねる花は『トサミズキ』でしたが全然わかりませんでした。どんな花なのか飯田さんに教えてもらおうと、色は蠟梅のようで、マンサクのような花のつき方をしているという事です。楽しみにしていましたので残念でした。ヤブツバキを三輪だけ見ました。

栗河内への分岐点通過は二時四十七分です。道の脇にちよこんと置かれた石仏に石川さんがお酒をお供えしています。代表して安全を祈願(?)したりして。道が急に開けたと思っただら林道に二時五十五分出ました。ここからはまた、自然歩道に入っていく組と、林道を下る組とに分かれました。自然歩道組は先頭集団が余りに早く下りてしまつて、とうとう後部の二人が追いつけなくなつてしまいました。迷う事のない自然歩道ですが、携帯電話で連絡がとれて一安心。「作業道新設記念」の碑の近くの車の所へ十三時三十五分下り着き、待つていた三浦さんが出迎えてくれました。今回のメンバーがここで初めて全員顔をそろえました。

付記

この日、私たちよりあとに古処山に登った人たちがいました。阿南さんご一家三人です。

付録

前に、地元の小学生が登っていると書きましたが、足白小学校の子供たちの標語が山頂や道の脇にありました。地球を大切に願う子供たちの気持ちを感じてメモして帰りました。それをご紹介しますと思います。

『森いっぱい木をふやして地球を守ろう(六年生)』
『未来へと残していこう地球の緑(六年生)』
『広めよう緑の豊かさ世界にも(五年生)』
『木を植えて緑をたくさん増やそうね(六年生)』

参加者：安部、飯田、石川、小竹、佐藤(秀)、佐藤(正)、遠江、中野、奈須、牧野、三浦、長野、西(孝)

上福根山、岩宇土山

(三月月例登山報告)

佐藤 秀 二

福岡を大分組と同じ午前五時に出発して、高速経由で御船インターを降りて五家荘へ向かう。

美里町(旧砥用町)を右折し雁股峠の二本杉展望所へ。ここで大分組に連絡をするが、携帯がつかない。大分組より高速道路に乗っている時間が長いため、おそらく先に着いているだろうと思ひ、先に登山口を目指した。

二本杉展望台からさらに奥へ三〇分ほど、八代市(旧泉村)久連子地区へと向かう。「久連子古代の里」の先およそ一km足らずのところの登山口がある。すでに、多くの登山者が登っているようで、登山口周辺の道路は車が一〇台程度停車していた。昨年の台風で一部登山道が崩壊しており「利用しないでください」の立て看板が立っていた。

大分組はまだ到着していないようで、「久連子古代の里」付近に戻り、待つこと一〇分、見覚えのある大分ナンバーの車の群が数台降り過ぎ、中野さんが私の車に気がついて停車。登山口付近は既に車が混んでいることを説明した後、一緒に登山口へと向かった。

登山口とされているところは、民宿のすぐ横でいきなりの急登。これも、「台風被害による迂回路か?」と思わせるようなところであるが、案内は何もない。上福根山へは、岩宇土山を経てひたすらに尾根道を歩く、月例登山では久しぶりの標高差およそ一〇〇〇mで、じっくりと登る。

最初、急登が続くが三〇分も

すると尾根道に出る。尾根道に出るとひたすらに尾根を伝いながら登る。植林地のような場所で、足下が悪いところをトラバースするように歩いていると、前方で悲鳴が聞こえた。何かと思つて尋ねると今月のテーマの花である「福寿草が咲いている」とのことだった。

行ってみると、既に撮影会が始まつており、ちょうど今日咲き始めたような可憐な花が登山道沿いにたくさん咲いていた。皆思い思いに撮影をし、後ろ髪を引かれる思いで再出発。植林地を過ぎ、次に岩屋のようなところ(久連子鍾乳洞)を過ぎた後、急に道が開け、石灰岩質の伐採した植林地に出る。ここを登り詰めると岩宇土山の山頂で



ある。
山頂は、登山道の途中にあり標識があるだけ。山頂からは上福根山が見えて展望がよいが、山腹に伸びる林道が見えなければもったいないのだが・・・。とりあえず記念撮影をして、上福根山を目指す。



(岩宇土山にて)

いったん標高五〇mほど下って鞍部に出て再び登る。およそ三〇分ほどで林道に出る。ここまで車で来られたら楽だろうなと思いつつ登山道に入る。すぐに急登となり見た目以上の坂にちょっとびびりするが、急登はそう長くは続かず、ひたすらに頂上を目指す。

シヤクナゲの群落となり、道がわかりにくく、シヤクナゲの中を右に左によけながら歩いて

いると頂上に到着。

頂上で食事を取ってゆっくりしていると、聞き覚えのある声があった。なんと西さんが登ってきたのだ。途中でひき返すと言っていたので、登ってこないだろうと思っていた。まさか三分の遅れでここまで登ってくるとは思ってはいなかった。思わずみんなで拍手で迎えた。本人は「これぐらい大したことではない」と言っていたが、皆にとってはそれほどの快挙であった。記念撮影をやり直し、お得意の「バンザイ」と「ヤッホー」で締める。それが済むと西さんはさっさと下山していった。まるで台風が通り過ぎていったみたいであった。



(上福根山にて)

先に到着した組も後を追って頂上を出発。同じ道を下る。林

道を過ぎ岩宇土山直下の鞍部に当たるところで、右に下山路があるものの「利用しないでください」の立て札が立っていたので、皆で相談の結果、岩宇土山を経由して下山することを決定。後にこの選択が重要な選択になるとはこの場では誰も考えなかった。再び岩宇土山へ登り、登りと全く同じルートを下山。黙々と歩いて登山口に到着。岩宇土山まで先に下山していた、安藤幹さんに会い、話を聞いたところ、岩宇土山からの下りは同じ道を下るのもなんだからと、例の岩宇土山の鞍部からオコバ谷を経由して下ったとのこと。で、天気良かったため足場も悪くなく、踏み跡もしっかりあって道に迷うことはなかったとのことであった。さらに、途中には尾根道にあった福寿草の群落ではなく、一面が福寿草の群落があったと聞いて、「あそこで曲がっておけば」と思ったのも後の祭り。ちょっと残念な山行となった。

参加者：安部、阿南、安藤、飯田、佐藤、秦、園田、遠江、中野、長野、那須、西

翌日は蕨野山へ

中野 稔

足下の明るいうちに平石に在

る久連子荘近くの登山口に着いた。ほぼ予定どおりだとのこと。福岡や大分に帰る組と今夜の野営場所を探す組は、岩宇土山を過ぎたあたりで、足早で一足先に下り、最後の我々三人が下り着いた時には、登山口には安部先生しか居なかった。

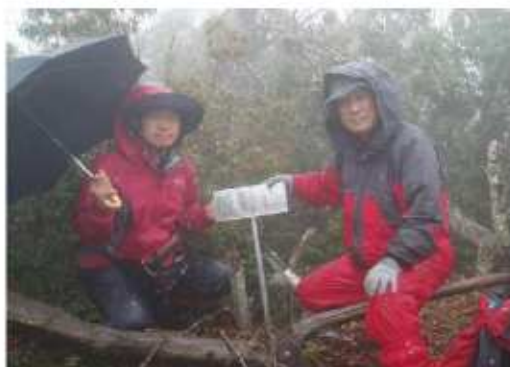
残った七名は、石楠越方面に延びる林道の、標高一〇〇〇m付近に大きな広場があるのを見つけ、そこを今宵の野営場と決める。ヘッドライトで野営の支度をしていると、若い二人づれの車が近くの様子を聞きに着たらしいが、福寿草がお目当てだと思ふ。

鍋奉行の遠江さんが野菜類と猪の肉を適度に煮込みながら、六人で乾杯をして賑やかな宴会の中で、明日の山の予定を考えていた。林道工事の資材が沢山積んでいる広場でおぼろ月を見ていると、明日の天気期待できるとおもったが、雨は早々に降り出した。

午前五時ごろ雨の中、朝食を摂りながら、三名の有志が蕨野山へ行くことになり、二名は山へ行かずのんびりと古里へ帰ることとなり、残ったうちの二名は登山口で留守番と言うことになる。

野営地点から一キロほど下ったところに、蕨野山へのとりつきと思われる道を、前日夕方飯田さんがさんが見つけていた。登山口と言っても植林の為の作

業道のようにであり、山頂まで行けるかどうか保証はないが、尾根を辿れば何とか成ると言う長年の経験で力強く歩き出した。六時四五分出発。高度差約五〇〇m、片道一・五百。登り一四〇分、下りは七〇分だった。途中鹿除けネットを二回掻い潜り、竹藪を二〇mぐらい押し分けたぐらいであとは比較的歩き易かった。



(蕨野山にて)

山頂付近では雨が雪に変わり、皮手袋も冷たく濡れ、下りには乾いた手袋に替えた。途中蕨野山の名前の由来はなんだろうかと考えたが、答えは山を見る限り浮かんで来なかった。

蕨野山の東に三キロメートル位で山犬切(やまいんきり)があるが、山犬切とは穏やかな名前ではない。西に二キロメートル

ル弱で積岩山（つみいわやま）が在る。いつの日か良く晴れた日にもう一度挨拶に行くことになるだろう。東隣の鷹巢山（たかんすやま）にも。

安部、飯田、中野

グリーンデルワル トトレツキング

（その六）
八重康夫

JTBのデスクに電話して、ドゴール空港のどこに行けばよいか確認した。そうしないとタクシーに乗ったとき、行き先を告げられなくて困るからだ。すると、出発時間は、二〇時〇〇分で、三時間前からしか搭乗手続が出来ないので行ってもすることが無いと言われた。三時間前ということは、一七時〇〇分で、今一四時三〇分だからまだだいぶ時間が有る。しかし、空港まで混んでいたらとも思い、一五時過ぎにパリ・リヨン駅前でタクシーに乗った。

葉が出てこない。タクシー運転手も英語が分からない風だったが、とにかく戻ることだけは分かって、乗ったところにすぐ戻ってくれた。どこに落ちたかはつきりとは分からないので直ぐ見つけられるという自信は無い。それで、トランクと荷物を降ろそうとしたが、運転手が、ジェスチャーで、だめだ荷物は置いて行けという。こちらにもメーターのお金を支払って「ノー、ノー」と言うがだめである。メーターは二・八ユーロを示していたが、手元にあった、五ユーロ紙幣を渡すと、何とか納得して、降ろさせてくれた。ザックを担いで、トランクをこるころ引きながら慌ててホテルに戻り、自分の座っていた椅子の辺りをみると、携帯がこるがっていた。ホツと胸をなでおろし、やっと落ち着くことが出来た。

そして再度別のタクシーに乗りなおし、ドゴール空港へ向かった。車はそれ程混んでいなくて、三〇分ほどで、空港に着いた。降りるとき、二二ユーロのメーターに対し三五・七ユーロ要求したので払おうとしたら、小銭が無く、三七ユーロ出したら、そのままもおおうとする。それでおつりを出せと言ったら、しぶしぶ一・七ユーロ戻してくれた。チップに慣れていないので本当に気分が悪い。

ドゴール空港の表示はとても見にくい。どれが目指す場所なのか初めての物にはとてもわかりにくい。なんとか全日空の受け付け窓口を見つけ、そのあたりで一時間以上待つことにした。空港には、コインロッカーが一つも無いらしい。途中、あたりのお土産店を回ったが、税関を通った所でないとならない。仕方なく、ぼーっとして搭乗手続が始まるまで待った。やっと時間が来て始まると、何と受け付けるコンピュータ五台のうち、三台が操作不良になっているのがわかった。五時前から動くかどうかわからない調べておけよと言いたかったが、仕方なく、動作するコンピュータの前に並び、手続きをした。

そして、パスポート検査を受けて、免税店で、チョコレートなどのお土産を買った。搭乗まで一時間くらいまだ時間が有り、隣に座っていた元気の良い日本人老夫婦と話をした。リタイヤ後、もうだいぶ諸外国を回られたようだ。旅なれている。島津製作所に三〇年勤めていて退職したらしい。現役中に頑張られたせいか、退職後もいろんな仕事で回ってきて、あちこち仕事と旅行で、現役時代より随分楽しいらしい。自分もああいいう風になりたいものだ。

途中二度食事が出た。国際線のスチュワーデスはカッコイイとは思いますが、重労働だと思った。行きは軽い眠剤を飲んで効き過ぎたので、帰りは代わりに良く寝れる風邪薬を飲んだ。これで三時間くらいは眠れたように思う。

一四時四五分、やっと成田空港に着陸した。これでまだ着いた訳ではない。今からリムジンバスで羽田に向かい、羽田から大分に飛ぶことになる。緊張したが、入国手続きは、簡単にすんだ。トランクを開けさせられることもなく、すんなり通れた。あせって鍵を探したのもうそみたいだった。リムジンは五〇分くらいで羽田に着いた。羽田空港に着くと、うれしくなった。やっと見慣れた場所に来て、着いたような気がした。

羽田をたつたのが一八時二〇分、大分には一九時五〇分に着いた。自宅に戻りついたら二〇時三〇分を回っていた。グリーンデンワルトを出たのが日本時間二二日午後一時前だから、三二時間弱かけてやっと帰りついたのであった。

大変だったが勉強になった。日本の常識は世界では通用しないという片鱗を垣間見た気がする。あちらで、ホテルの従業員や、列車の駅構内の人達が皆冷たく感じたが、向こうでは、楽しく旅行するためには自分で準備しなければだめなんだと言う

了解があるみたいだ。日本のお客は甘えているのかしれない。自分としては日本のほうが当然居心地が良いが、ともすれば直ぐにサービスが悪いのなんのという御託を並べる前に、こうしたことも思い出そうと思った。

（6回連載終わり）

秋の単独行

安部可人

去年は二月二四日ひとり小川岳と祇園山に登り、高千穂道の駅で車内泊。翌日黒峰へ登り、初しぐれ、わびしかった。さて、今年十一月九日、快晴、三時半運転して栢川登山口着。九・〇〇、京ノ丈山へ向かう。稜線から三十分間の高いササくぐり、実に不快。黒茂から八キロ、悪路の林道は落ち葉を敷きつめ、紅葉のトンネルは実に美しかった。

キリシタン大名、小西行長の焼き討ちで唯一残った名刹福城寺の駐車場着、二・四〇、急登五〇分で甲佐岳着。立派な標識には「元九州百名山」とあり哀しい。日暮れていきひどく疲労、

胃痛。通潤橋の国民宿舎で入浴。下の道の駅で車中泊。

十一月十日、快晴、冷える朝。うどんの朝食、川の口から矢筈岳の峠の登山口へ、八・四十出發し二十分登山頂。すばらしい朝の眺め、一匹の蜂が襲来、下山いそぐ。今年はネットと殺虫剤は必携。

目の前の遠見山は疲労と蜂の恐怖のため断念。すぐ近くの安徳天皇御陵を見学。壇ノ浦で入水したのは別人で、この天皇は当地で十七歳まで生きのびたのだ。その顔のカラー写真があり驚いた。東京からおいででの某宮様の写真も神社で見た。

平成一七年

登山記録

児玉章良

毎年一〇〇山を登ることを年頭に掲げ実行している。昨年は一二八山だった。今年はず、一月八日に佐藤(壮)先生と鹿児島県まで足を延ばした。最初に「鹿屋市」に宿泊し、大隅半島三岳参りで有名な「甫与志岳(一等)」「黒尊岳(三

等)」「国見山(二等)」に登った。夜は「加治木」まで戻り、宿泊した。次の朝、指宿スカイラインに乗り「千貫平(二等)」に登った。と言っても散歩程度。

「開聞」に降りたとき、ちょうど「菜の花マラソン」が開催されていて、巻き込まれてしまった。抜け出すのに苦労した。やっとの思いで「鰻池」まで行き「鷲尾岳(三等)」に登った。「加治木」まで戻り「牟礼ガ岡(一等)」「赤崩(三等)」に登った。「牟礼ガ岡」は風力発電の風車が数多く建設されていた。登山道より、車で上がれる道がではじめていた。近く、観光バスで山頂に立っててである。

この日は「隼人」に泊まった。次の日「烏帽子岳(二等)」「長尾山(三等)」「仏石」…「木仏石」に登り、帰り際に「丸岡展望所(四等)」に立ち寄り、最後に霧島山群の「粟野岳(三等)」に登った。「粟野温泉」に浸かり三日間の疲れを取り、三重町まで戻ってきた。

これで、分県登山ガイド四五「鹿児島」に記載されている五二山の内、四三山が終了したことになる。一六日は白杵市の「白石山(三等)」に登った。二月は津久見市の「池の谷山(三等)」、佐伯市の「東峰(四等)」、上浦町の「源徳山(三等)」に登

った。三月は蒲江町の「しげじ山(三等)」、白杵市の「諏訪山(三等)」に登った。四月には佐藤(壮)先生が転勤となり山に行く車(ポロ)がなくなってしまう。職場も統合ということにわかに忙しくなり始めた。

なんとか定例山行や分水嶺登山に参加しなければならぬと思っていたが、運悪く六月頃からヘルニアが出はじめ、とても山には登れない状態になった。また、四月から「日本愛玩鶏協会」の支部長、「日本鶏保護連盟」…「日本尾長鶏保存会」…「日本雉類研究会」会員となり約六〇種の鶏を世話することとなった。つまり土日が容易に動けなくなってしまう。全く山に登れず、いたずらに月日だけが過ぎて行行った。

八月に腰のリハビリを兼ねて佐賀県の「雷山(三等)」に登ってみた。「嬉野温泉」に泊まり温泉療法を試みたが今一歩、本調子にはならなかった。その後、ずーと忙しく、やっとならぬ間に日田市の「山犬岳(三等)」「田代山(三等)」に登った。やっとならぬ間に腰が回復したようである。この後、山に登りたかったが車がない。ついに一年も終わってしまった。全部で二二山。一〇〇〇山まで七八山足りなかつた。来年は何とか一〇〇山登るぞ！と思う今日このごろである。(転勤なのでどうな

るやら?)

※ 安部さん、児玉さんの原稿は今年の一月に頂いていたものです。

(K・I)

私の無名山ガイドブック25

飯田勝之

鶴見北尾根の脇道

(その二)

「狸峠」

鶴見岳北尾根は大小いくつものアップダウンを重ねて十文字原へと高度を下げていおり、その間には馬ノ背や船底、塚原越など大きな鞍部があるが、最後に高平山にせり上がる前の小鞍部が狸峠だ。

狸峠といえば元大分医科大学の故本多夏生教授のことを思い出す。口数の少ない教授が「狸峠を歩いてみたいと思うんだけど、飯田さん、知ってる？」と言ったのは、とある支部の月例山行の時であった。「何処の狸峠です?」「別府の明礬の上

にあるとか聞いたけど」「ああ、あの峠、何の変哲もないちつぽけな鞍部ですよ。なんでそんなところを・・・?」「いやあ、ちよつと・・・名前がおもしろいじゃない。狸峠なんていう名前は珍しいよ」「ちよつと変わった名前ですよ」「一度行ってみたいねえ」「そうですか。じゃあいつかご案内しましょう」などと会話したのを思い出す。教授はほどなく退官し、暇になるかと思ったらカリブ海方面の国に仕事で出かけて行くようになり、その後突然病で倒れられて、ふたたび山登りが出来るような体に戻ることはなく、亡き人となってしまわれた。教授が興味を持たれた名前の、『狸峠』にご案内する機会はないに

なかつたのである。今回はこの峠を紹介してみた。この古い峠は昔はたぶん別府の明礬や湯山などと、天間や安心院方面をつなぐ峠道であったと思われるが、その面影は別府側にはわずかに残っているものの、塚原側には残されていない。この峠は鶴見岳北尾根をやる人なら、最後まで足を延ばせば必ず通過するが、峠越えをするのはよほどの物好きでなければまずないだろう。(猟師たちは近年は、これから紹介する林道を車ですべて、峠から稜線の山中に分け入っているようである)

由布院の塚原から十文字原に向かう県道を行くと、塚原温泉の入り口の一キロほど先の右手にアンテナがあり、さらにその先、〇・五キロのところの右手に鎖で仕切られた林道が延びている。これが塚原側から入る狸峠への道で、伽藍岳の裾を巻いている林道だ。

ゲートからほぼ平坦な林道をどんどん中へ入っていく。さほど荒れていなく、のんびりウオーキングに適しているが、残念なことには両側ともスギやヒノキの植林地だ。四〇分ほど歩くと両側が天然林となり、なんとなく深山の趣が感じられてくる。(二万五千分の一の地形図では林道はこのあたりで終わり)

緩いカーブの登りとなって、わずかに登り越すと突然目の前に広い茅野の原が広がって、一帯はちよつとした湿原の窪地となつている。林道は草原に消えている。「こんなところにこんな湿原があつたのか」と思わせるような、小さな坊ガツルという雰囲気、静かなたたずまいが山の深さを感じさせてくれる。茅野の中にある踏み跡をたどるとヒノキの植林地に入り、薄暗い林の中をジグザグに一〇分ほど登ると小さな鞍部に達する。ここが狸峠である。

薄暗い植林地の中の小さな掘り割り、「狸峠」と書かれた小さな標識もあり、掘り割りの向こうへ古い荒れた道が続いていて

いる。右からは鶴見岳からの縦



走路が植林地の中を道が下りて、左へは広い防火帯の中を縦走路が上に延びている。この防火帯は高平山を経て十文字原まで続いているものだ。

掘り割りから古い荒れた道を進むと、緩い下りで、アセビやヤマツツジ、リョウブなどの灌木の中を縫うように続いている。しかし荒れ果てて、注意しなければはぐれてしまうような道の跡である。一五分ほど下るとその道もほとんど判然としなくなる所があるが、稜線に近い灌木の中を下っていくとふたたび道の跡を見いだすことが出来る。

下の林の向こうから「バーン、バーン」と音が聞こえてくるのはライフルの射撃場の音だ。流れ弾が飛んできはしないかと心配になるが、相当離れており大丈夫だ。

峠から二〇分ほど下ったあたりで、左手すぐ上に稜線が迫ってくる。そこは開けた草原の防火帯である。そちらに出て急斜面の防火帯を下ればライフル射撃場を経て湯山の国道五〇〇号に出ることも出来る。しかし峠道をたどるのが目的なので、そのまま樹林の中を行こう。

比較的樹高の高いナラやクヌギにカシやタブの混交林の中をかなり広い道の跡が続いており、おそらく昭和三〇年代までは馬車などが行き来していた道であろうと想像できる。しばらく下ると植林地に変わる。スギとヒノキの樹林の中をわずかにそれと分かる道の跡がカーブしながら下っている。さほど急な斜面でないのにカーブしているのは造林のためにトラックも通っていた古い林道の跡だろうか。道がほとんど平らになると、いっそうしつかりした道となり、ほとんどなく人家の前に出て、民宿の前の舗装道路を一五分ほどで国道五〇〇号線、湯山のバス停留所に出る。

地形図：25,000分の1
別府西部

参考コースタイム：県道塚原側入り口ゲート(五〇分) 茅野の窪地(二〇分) 狸峠(四〇分) 天然林から植林地

(三〇分) 湯山民宿前(二五分) 湯山バス停



今西錦司 ⑥

西 孝子

レリーフ

あずさと穂高を育てあげながら、二十八歳より七十四歳まで

住んだ古屋から、移転のために片づけをしていた時のことである。出てきた封筒の表紙?に「今西錦司先生記念碑完成記念・日本山岳会京都支部」とある。これだ・・・。

鴨川の音を聞きながら、歩いていたら、当時京都支部長斉藤先生が車で通りかかった。乗るようすすめられたが、ザックだけ預けて私は歩いた。今西先生が若い頃、いや学生の頃だ、北山をかけたまわっていた時分に歩いた道だ。様子は変わっても知りたい気分である。両手にストックでウオーキング。

車止めより先は道は細く、のんびり歩けない。油断をすれば谷に落ちそう。鴨川の源流の直谷である。車止めより約一時間で、谷間のわずかに広い場所。そこに今西錦司先生のレリーフはある。豊かな自然を選んだ京都支部の方々のご苦労がしのばれる。今にも落ちるのではと思われような、斜めになった大きな岩は苦むしたままである。しかし岩の上は広く、休むには好都合な場所である。レリーフの笑顔の口もとは、今にも酒を召し上ちそうな・・・と飲兵衛の先生のことを思い起したのは私だけではないだろう。

一九九四年六月一二日、レリーフの除幕式に参列したおりのこと。式の前京都支部長より「式の中で万歳の主唱をお願いします」と言われて、おこがま



岩の中の先生（レリーフ）



万歳三唱

しくも引き受ける。そしてその時がきた。一瞬心臓の高まりをおぼえる。三角点でいつも先生が行なう仕事を説明し、ストックを一本、両手で持ち片足を前に出して「ばんざーい」。

先生の山行のお供をしたことのある方たちにはおなじみだが、初めての方は『不思議』な顔・・・とは今になってこの写真を見て感じる。このあと全国支部のレリーフの紹介。

集会の参加記念にいただいた三枚一組の絵はがき。その中に、

『万歳』の場面のもが入っているのに驚いた。選んだ方からそっと「これを選んだ」と説明をしていたのだが、良い記念である。

そのあと直谷へは三回訪れている。いつも六月一日前後である。レリーフを守る会では毎年、岩の下に石を積むのである。去年、一三回忌近くの日曜日、京都植物園前より横田支部長の車でいく。道も良くなり、車道も奥まで延びている。車止めより三〇分（私の足で）程度でつ

ていますまか？

その後も私は、三角点を求めては今西流の「万歳、万歳、万歳」を続けているのでございます。同行者皆様もどうぞよろしく・・・。なお、先生は山頂とお別れする時には「ヤッホー」を三回。この中の三回目のヤッホーは、ややトーンを上げて言うのです。私はこれに「もう二度と来ません」や「先生はこの山には登っていないでしよう？」をつけ足すのです。

いた。

レリーフより上流へ約一〇分のところに、先生が旧制中学の頃からあつた小屋がある。その小屋で昼食。前にはウツギの花が咲いていた。また今度いつ行けるかな？

みなさん、今年の『文藝春秋』の二月号をご覧になりましたか？『昭和の五〇人』に先生が選ばれています。先生、天国で万歳してください。

定例総会で決まった主なこと

◎第五回青少年体験登山大会

今年も青少年体験登山大会を開催します。期日は夏休みの第一日曜日ということで、七月三日を予定しています。行き先は恒例の久住山へ牧ノ戸ルートです。会員、会友の皆さんはあらかじめ予定して、身近な青少年を誘って参加して下さい。

◎今年は一ニ支にちなんだ山に登ろう

月例山行は今年度は十二支にちなんだ山に登ることとなりました。直接千支の動物を表す名前が見あたらなくて、相当にこじつけた山名もあります。バラエティに富んでいます。皆さんと一緒に登りましょう。

一八年度月例山行計画

- 五月…（酉とり）鷹鳥屋山（佐伯市・宇目）
- 六月…（子ね）三子山（島根県・津和野、益田）
- 七月…（丑うし）牛ノ峰（愛媛県・伊豫、大洲）
- 八月…（寅とら）虎ガ峰（熊本県・阿蘇）
- 九月…（卯う）兎巾岳（頭巾岳）（宮崎県・五ヶ瀬町）
- 一〇月…（辰たつ）竜峰山（熊本県・八代）
- 十一月…（巳み）蛇谷山（谷ガ迫山）（国東市・安岐）
- 十二月…（午うま）馬糞ヶ岳（山口県・周南）
- 一月…（亥い）猪群山（豊後高田市・真玉）（一ニ支会）
- 二月…（未ひつじ）大仁田山（望洋台）（宮崎県・五ヶ瀬）
- 三月…（申さる）元猿山（佐伯市・蒲江）
- 四月…（戌いぬ）大鳴山（福岡県・筑豊）

◎猪群山で一ニ支会

一ニ支会の今年度の千支の山は、来年一月に大分県の猪群山に決まりました。支部の月例山行とセットで実施することとなりました。全国の山の仲間を歓迎し、交流する大会となりますので、支部員の皆さんのご参加とご協力をお願いします。

◎支部結成五〇周年 に向けて

二〇一〇年(平成二二年)に東九州支部は創立成五〇周年を迎えます。半世紀を数える支部の歴史を記念する年となります。各種行事や事業については、早めに計画して準備することとなりました。五〇周年にふさわしい記念行事や事業について、皆さんの提案をお待ちします。

お知らせ

五月月例山行の ご案内

- ・月 日：五月二八(日)
- ・目的地：横山(772.2m)
鷹鳥屋山(639.1m)
(佐伯市宇目町)
西(とり)の山旅

**安東幹・茅野亨生さんの
喜寿のお祝い登山会**
今年めでたく喜寿を迎えられましたお二人の、お祝い登山(横山・772.2m)と、月例山行鷹鳥屋山(639.1m)と一緒に実施します。多数のご参加をお待ちしています。

- ・出 発：午前五時サニール出発
- ・現地集合：木浦小学校前

- ・先に横山に登り、その後鷹鳥屋山に登ります。
- ・午前七時

六月月例山行の ご案内

- ・月 日：六月一〇日(土)
- ・目的地：三子山(739.7m)
(島根県)
子(ね)の山旅
- ・出 発：サニール午前五時発
翌日一二日(日)は安蔵寺山(1,263m)(島根県の最高峰)を予定しています。
- ・テント、シュラフその他野営の準備をして下さい。

七月月例山行の ご案内

- ・月 日：七月八日(土)
- ・目的地：牛ノ峰(895.5m)
(愛媛県)
丑(うし)の山旅
- ・出 発：前夜(七日・金)臼杵港から出発の予定ですが、時刻等詳細は別途参加者同士で打ち合わせの予定です。
- ・翌日九日(日)は高縄山系(松山市の北方)の山を予定しています。
- ・テント、シュラフその他野営の準備をして下さい。

役員会のお知らせ

- ・日 時：六月七日(水)

- 一八時〇〇分より
二一時まで
- ・場 所：大分市「コンパルホテル」

・役員の方々はあらかじめ予定し、ご出席下さい。改めて案内状は出しません。

入会申込書について

同封しました入会申込書は、百周年に向けて、支部員の名簿を再整備するためのものです。入会時に提出して頂いたものは本部に送付して頂いて、支部には控えがありません。また、顔写真もないため分かりにくい場合があります。

このため支部員全員(会員・会友)のものを備えたいと思います。お手数ですが全員記入のうえ、八月末ごろまでに事務局にお送り下さい。なお、山行歴については今まで登った山の主なものを、年月順にお書き下さい。詳しいものは要りません。山名が分かれば結構です。

事務局移転のお知らせ

事務局の所在地、サニールポーツが店舗改築のために移転しました。新しい場所は前の所

から南に約40mのところですが、電話・FAXは変わりません。

後記

- セリ、カンゾウ、タラの芽、ウド、コシアブラ、ハリギリ、シロザ・・・、春の一時期のみに限られる山菜の嬉しさ。ことしも春の到来を今か今かと待ちわびていました。
- フキノトウがまだ溶け残った雪に埋められている時、朽ちた古い枯れ葉を見つけて、その付近をあさり、まだ丸くて固いフキの芽を採るのも痛々しい思いに駆られながら、そのほろ苦味の誘惑にうち勝てずに採ってしまいました。
- タラの芽を採りに行くと、新芽の部分元からぼぼつきりと採っているのによく見かけ「ああ、この木は多分来年には枯れた姿しか見れないだろうな」と思ってしまった。
- 新芽を根こそぎ採られては、せつなく息吹始めた命をそぐようなもの。
- この春、勤めを辞めました。四十幾年の間働き続けて、初めて経験する浪人生活です。働いている間には、あれもこれも辞めたら暇になるので片づけようと、後回しにしてきた数々のこと

日本山岳会東九州支部報 第33号

2006年(平成18年)4月25日(火)
 発行者 梅木 秀徳
 編集者 飯田 勝之
 発行所 〒870-0021
 大分市府内町1-3-16
 サニールスポーツ内 西 孝子方
 TEL・FAX 097-532-0926
 題字 佐藤正八

その全部が全く手をつけられていません。いつでも出来る・・・は、いつまでも出来ないと言ふことなんだ・・・なんて一人合点

○ 手持ち無沙汰はいつそこの手持ち無沙汰を誘うものなのかもしれない。やる気を見失うものかもしれない。そんなわけで、支部報の発行もつい、つい先延ばしに・・・、みなさんすみません。遅くなりました。

(K・I)